



**とつぜん妻が
相続することになりました。**

まるしいたけ

【はじめに】

僕は普通のサラリーマンの息子。
今も少し開けた町で普通に働くサラリーマン。
妻は会計事務所に勤めている父の娘。三弟妹の長女。
結婚して10年。子供は一人。

そんなごく普通の家庭で普通の暮らし。
全く財産とか相続とか無縁だと思ってた。

そんな時、とつぜん妻が相続することになりました。

これから起こるいろいろな事件(笑)を妻に内緒で
日記ついでにブログを書くことにしました。

まあことがことだけにあまり詳しいことは控えながらも、
一番近くの部外者から見た相続を書きたいと思います。

僕や妻などの家族は法律の専門家でもないので、
素人目線で自分たちで調査したことや、行った行動を
書いていきます。

今後内容に書く、判例や事例はあくまでその当時の情報

なので、最新の情報と違う場合がありますので、
ご注意ください。

あくまで一例の範囲内で見て下さい。
書けないこともあるので、限りなく事実に近い
フィクションとしてご覧ください。

それと、僕にはお金の決済権はありませんので、
勧誘などはお断りさせていただきます。

更新もあまりできないと思っています。
今現在このブログは妻には内緒なので・・・。

妻にバレたら中止になるかもしれませんw

2009年7月某日

突然妻の携帯電話に都内に住んでいる、Kおじさんからの突然連絡。Kおじさんとは妻のお義母さんの弟である。

内容は、疎遠になっていた妻の祖母の訃報。

祖母が亡くなって、妻達3人弟妹に相続権があるが、相続に巻き込ませたくないから放棄した方がいいとの連絡。

妻の母、つまり僕のお義母さんは2001年に突然倒れ亡くなった。

結婚して、子供が生まれてすぐの事だった。当日も元気にしていた。洗面所に紙おむつを捨てに行き、そのまま倒れたのだ。

帰ってこないお義母さんを心配して、洗面所に確認しに行ったのは妻だった。

第一発見者である。

そのまま救急車で運ばれたが、意識を戻すことなく亡くなった。

その時、子供は生後52日目の出来事だった。

あまりにも突然で僕にとっても衝撃的な事で、家族にとっても言葉にならないくらい大変な時期がしばらくあった。

Kおじさんからの連絡内容を聞いていると、おばあちゃんは6月にすでに亡くなっているらしい。どうやら葬儀の連絡ではなく、いきなり遺産相続の権利があるがどうする？という連絡だった。

本来であればお義母さんが相続人になるのだが、亡くなっている為、妻の弟妹の3人に相続権がある。

妻は、弟妹に確認することを伝え電話を切る。

僕は妻にどうするのか聞いてみる。自分たちは、お義母さんの代わりだから放棄しないとのこと。

県外の実家に住む弟くん、妹ちゃんに連絡。落ち着いた弟くんは、どっちでもいいとの回答するので、相続の方向で。妹ちゃんは放棄しないと回答。

後日Kおじさんから連絡があり、相続する事を正式に回答をする。

これから長い相続が開始することになる。

妻の場合は本来の相続人のお義母さんが亡くなっている
るので、その子である妻たち3人に代襲相続の権利がある。

代襲相続とは、【ウィキペディア】より
相続の開始以前に被相続人の子あるいは被相続人の兄弟姉妹が
死亡、相続欠格・廃除によって相続権を失った場合、その者
の子が代わって相続する（887条2項本文・889条2項）。
これを代襲相続といい、代襲相続する者を代襲者、代襲相続
される者を被代襲者という。

おばあちゃんの財産の相続人は全部で7人。妻たち3人の他には、
お義母さんは四兄妹なのであと3人いる。それと健在であるおじいちゃん。

亡くなったおばあちゃんの夫であるおじいちゃんには、
法定相続では1/2の権利がある。長男、Nおじさん。
長女、お義母さん→妻たちが代襲相続。次女、Sおばさん。
次男、Kおじさん。残りの1/2を4人で割った分が法定相続の
権利がある。つまり法定相続分而言えば、1/8をさらに妻たちが3人で
分ける権利があることになる。

あくまで法定相続を分割協議が決まれば・・・である。

僕にとっては、正直何が起きているやらって感じですが、テレビとかで見る相続ってイベントをプラチナチケットで観覧できるってことのように。って思ったけど、いろんな事が起こりすぎて、じっくり観覧する余裕なんかない。

普通に暮らしてきた僕には想像もつかない事が起きていく事になる。

相続の話が出てきてから、妻は弟妹たちに電話をすることが多くなった。元々、家族は仲が良く、お義母さんが亡くなってからも家族で協力して今まで暮らしてきた。会話の中で、生前のお義母さんのことを話すことも多くなった。

テーマになるのは、お母さんだったらどうするのか？というところ。もう亡くなっているので、結局結論はでないのだが、生前の言葉から妻たちは、今回の相続についての方針を決めておきたいと考えているようだった。

一番大きな出来事は、亡くなる1年ほど前に、おじいちゃんにNおじさんを家を建ててもらっていた。その時お義母さんは大分怒っていたということ。

「自分には何も無いのに、兄ばかりに」と。お義母さんが結婚した時には、花嫁道具すら持たせてもらえなかったという出来事もあったようだ。

また、お義母さんは自分に相続権があることをわかっている上で、お義父さんや妻たちに話をしてきたこと。その上、はっきりではないが、相続する意思を示し、家族の会話の中で放棄する内容の言葉がなかった事。

ほかにもいろいろあるようだが、相続するというよりは、放棄はしなかっただろうという結論を出した。

お義母さんがいない以上、お義母さんにあった権利と内容をきちんと確認し、自分たちで判断していくことを3人で決意して、行動することになる。

おばあちゃんが6月に亡くなって、火葬や葬儀には全く連絡もなく相続の連絡だけで、その後のおそらく行ったであろう法事にもお声すらかからず、Kおじさんから相続権の連絡が来たのが7月某日。その後、正式に相続を行う事を回答しても連絡無し。

それでも、まずはお墓参りと健在であるおじいちゃんに会いに行き子供を見せたいと思った妻は実家の弟妹に連絡をする。

日程は8月の盆休み。妻、僕、子供と妻の弟妹の5人で行くことになった。

今、僕らの住んでいるところから、妻の実家までは車で2時間。そこからさらにお義母さんの実家まで車で2時間。

遠い。あまり運転をしない僕にとっては、めっちゃめっちゃ遠い。

そういえば、結婚するときお義母さんに言われたことがある。すごいところだって。おまけに言葉はわからない・・・って。

僕は少しくらい理解できなくても、まーなんとかなるだろうと軽く考えていた。

ちょうどお盆時期なので、8月中旬から休みになった。

僕も妻も地元が一緒なので、前日は僕の実家に泊まって、翌日妻の弟妹をひろって、お墓参りに行くことになっていた。

妻達も、もう何年も行っていないお義母さんの実家。
お墓の場所もうろ覚えなので、Kおじさんとお墓の近くで
待ち合わせて行くことになっている。

僕の実家で夕飯食べて、テレビみて、さて明日も忙しいので、
寝ようとした時、都内に住むKおじさんの奥さんから
妻に電話がかかってきた。

ええ??
なんでこの時間?
すでに23時を過ぎている。

あまりよくない予感。この電話で、さらに状況が変わった。

都内に住むKおじさんの奥さんからの電話。妻が電話に出る。

今日、おじいちゃんが亡くなった、とのこと。

言葉を無くす妻。お義母さんの葬儀から会っていない。

その時子供は、生後二ヶ月弱。今は、八歳(当時)。

おばあちゃんには、大きくなった子供を見せる事はできなかったけど、

おじいちゃんには見せたい気持ちがあった。

妻は、一晩中ずっと泣いていた。

そのまま朝になった。

おじいちゃんの訃報を受けた翌日。

妻が「お墓参りの前にYさんの所へ行きたい。」というので、妻の実家に行く前に寄ってみる。

時刻は朝8時半。

Yさんとは、僕の実家から2～3分のところに住む、妻の親戚の叔母さん。正確には叔母さんではないのだが、説明が複雑になるので、（僕もよくわからない・・・）これからYさんとしよう。

何度かあったことはあるが、自宅へ行くのは僕は初めて。

Yさんのお父さんが、親戚中のお世話をしていたこともあり、親族の情報をいろいろ知っている、いわゆる事情通。

親戚みんなが頭の上がない存在だった。

あっという間に到着。

ガレージには車。リビングの窓も開いてる。

呼び鈴を押す。

出てこない。もう一回。

やはり出てこない。

携帯電話に連絡してみる。すると、Yさんが出る。

驚いた様子で、玄関を開ける。

「ちょっとお、トイレだったんだけど・・・。」とYさん。

妻があいさつもそこそこに玄関でおじいちゃんが亡くなったことを話すと、驚きながらも、Yさんが中に入るようにと促しお邪魔した。

Yさんにはおじいちゃんの訃報連絡はまだのようだ。

お盆だったので、大きな祭壇が組んである。

妻と一緒に線香をあげ、手を合わせる。

お茶を頂き、Yさんが話を始める。

Yさんは亡くなったおばあちゃんと、仲が良かったらしく、最近の親戚事情をいろいろと話してくれた。

妻も、相続の事は黙っていたが、今日おばあちゃんのお墓参りに行く予定になっていたこと。

おじいちゃんには会えると思っていたこと。

子供を見せたかったこと。

お義母さんの葬儀の時に、いろいろあったけど会いたかったことなど自分の思いをYさんに話した。

Yさんは、おばあちゃんも疎遠になった妻たちを心配していたことを教えてくれた。
やっぱり孫だからね。とのこと。

Yさんはおばあちゃんの葬儀に出席していて、葬儀の席でSおばさんが土地を欲しがっていたことを話してくれた。
「帰りたいから、土地をもらいたい。もらえる分は貰う。」
と言うことをYさんに話したそう。

僕が一番驚いたのは、入院していたおばあちゃんはYさんに「お金は残した」と話をしていたということ。

ええええ。（心の叫び）

僕はこの時点で、やっと相続のリアリティを知るようになった。
その後は衝撃で、Yさん宅での話の内容を、正直あまり覚えていない。

時間もあまり無くお墓参りもあるので、子供がお菓子を
お土産でもらって、Yさん宅を出る。

車の中で妻がボソッと一言。「まったく。余計な物残して。」
まだこの時、僕はその言葉の意味がわからなかった。

妻の実家まで約40分。市内なのにハジからハジなので意外と遠い。妻の実家で弟くんと妹ちゃんと合流してお墓参りへ出発することになる。

妻の実家に到着。すでに準備が出来ている、弟くんと妹ちゃん。僕の車だと狭いので弟くんの車で行くことになった。

今回は、妻、子供、弟くん、妹ちゃんと僕の五人で行く。途中のコンビニで飲み物とおやつを買って。

妻の実家はインター近くなので、すぐ高速に乗る。そこから約一時間。高速に乗ってすぐ、妻はYさん宅での出来事を弟くんと妹ちゃんに話す。

高速降りて、道の駅で休憩。ちょうどお昼時間だったので、食堂でお昼にした。近づくにつれて会話が少なくなっていった。

昼食も終わり、そこから約一時間。高速は景色があるんだけど、降りてからはずっと山道。おまけに、携帯は圏外。全キャリア全滅。

僕にとっては危険な場所に行く気配。

しばらく走ると、待ち合わせ場所の道の駅に到着。
ここは携帯が通じるようだ。僕は少し安心した。

すでに到着しているKおじさん夫妻と会う。

Kおじさん夫妻とは、久しぶりに会う。
お義母さんの兄妹で一番末っ子で、兄妹の中で一番話をしやすい。

都内に住んでいるので、何度か僕たち家族は遊びに行ったりしていた。

とても穏やかな夫妻だ。

弟くんと妹ちゃんがKおじさん夫妻と会うのは、
お義母さんの葬儀以来かもしれない。

あいさつも早々に車でお墓に向かう。

妻達は車窓からの景色に、思い出を蘇らせている。

あまり変わってないけど、あったはずのお店が無くなっている。と、盛り上がっている。

お墓に近づくにつれ、運転手の弟くんが道を思いだしていた。

そして、長い坂の上にお墓があった。
日当たり良くとてもいい場所だ。

お盆時期もあって、結構人がいる。

妻をはじめ一人一人順番に手を合わせる。
最後に僕と子供は、はじめてのお墓に手を合わせる。

そして、お義母さんの実家のおじいちゃんに会いに行く。

お墓から、車で五分ほどで目的地のおじいちゃんの家に着いた。
広い土地に二軒の建物。
入り口付近の建物は、古い平屋建て。
奥には比較的新しい二階建ての建物。築10年位に見える。
二軒の建物の間に車を止める。

歩いて新しい建物の玄関前まで行く。近づくとかなり大きい
建物であることが分かった。いわゆるよくある田舎の家。

Kおじさん夫妻と一緒に中に入る。

広い玄関からすぐの奥が和室になっていた。
お通夜の準備の真最中で、襖もとって20畳ほどの空間に
おじいちゃんか横になってるのが見える。

葬祭業者が祭壇を組み立てている。親戚らしい人達も、
次から次へとやって来る。それらの対応をしてるのが、
長兄であるNおじさん。

僕にとってはあまり記憶に残っていない人。
でも、顔をみれば、結婚式にもお義母さんの葬儀にも来ていたのは分かる。「よく来た」とそれだけ言ってまた忙しくいなくなった。

それだけ??って思ったが、まあ喪主だし。と思ってそれ以上考えるのをやめた。

そのままおじいちゃんのソバに近寄った。

Kおじさん夫妻は、泣きながら手を合わせていた。
妻たち弟妹も、泣きながら手を合わせていた。

僕も子供と黙って手を合わせた。

この光景には覚えがある。

そう、お義母さんの葬儀。僕は生後二ヶ月の子供を抱き、親族席の一番後ろから見た光景にとっても似ていた。

相変わらずNおじさんは忙しそうだ。
少し落ち着いたところで、一人のおばあさんが近づいて妻に話しかけてくる。

「Tちゃん（お義母さん）の娘たちかい？」

「そうです。」と妻。

「あれから大変だったねえ。」などと妻と会話をしていた。

そのうち僕はヒアリングできなくなるほどの方言で、

あとで妻に聞くと、後半は理解できなかったけど、Yさんの親戚らしい。

しばらく何も無いまったりとした時間が流れ、
Nおじさんも少し落ち着いた様子。

妻たち三人だけがNおじさんから声がかかり、
リビングに通された。ノートを出して、
ここに住所、氏名、電話番号を記載するように妻達に言っている。

これは相続の話をするんだと思った僕は、
場違いと思い、子供を連れて外に散歩に行った。

子供と二人で出てみたが、時間をつぶせるような場所が無い。
コンビニも無い。お店も無い。
結局戻ってきて、子供は勝手に穴掘って遊んでる。

今後の日程を書いた看板も設置してあった。
見てみると、火葬も葬儀も完全にお盆終わってからの日程。
お盆から外れるので、スケジュール的に参列は困難。
日を選ぶ風習があるようで、やたら日数が空いてしまう。

お義母さんの葬儀の時もそうだった。
今まで疎遠になってしまったのも、その風習が原因。
原因を作ったのは亡くなったおばあちゃん。
火葬、葬儀の日程がお義父さんとおばあちゃん
大きくぶつかったのである。その後葬儀が終わって疎遠になった。
お義母さんの兄弟は正確な理由を知らず、
お義父さんが悪いことになっているらしい。

一時間弱で、Nおじさんとの話は終わった。
その頃にはすっかり祭壇は出来て準備ができていた。

暗くなり、お坊さんが来てお通夜が始まった。

19時頃、お坊さんも帰り僕たちも帰ることにした。

Kおじさんが見送りに来たので、妻が今後の
葬儀のことを聞いてみた。
「今回は三人、頑張っここまで来てくれたから
十分。後は大丈夫だから。」とKおじさん。

妻はわかったことを伝え、車は走り出した。

帰り道、妻が少し怒った様子で話し出す。

「おじいちゃんが亡くなったばかりで、
相続の話って何考えてるんだろう。」

やはりNおじさんの話の内容は相続とおばあちゃん、
おじいちゃんの亡くなった経緯だったようだ。

僕も同じことを思っていた。

結局Kおじさんの言葉があったのと、喪主からの連絡が
なかったので、葬儀には参列できなかった。

僕が思っている以上に、わだかまりがあるように思えた。

おじいちゃんにお別れをしてから少し時間がたった。
あれから、何も連絡がない。

夏も終わってしまった。

秋になって、10月半ば。

なんの前触れもなく、Nおじさんからの突然電話。

「遺産分割協議書にサインと実印をもらいたい。
それで急いであるので、そっち(妻たちの実家の方まで)
まで行くから、きて欲しい。」とのこと。

そこで、妻の感じた疑問。
なぜ、協議してないのに、書類が出来ているのか？

おじいちゃんのお別れの時には、そこまでの話は全く無く、
他の相続人も同席していなかった。

まずは、遺書があるのか？
それから、財産がこれくらいあって(現金、土地建物、有価証券など)、
負債があればその説明があって、誰にどの様に分けるのか。

それらの話合いがあって、遺書分割協議書が作れるのではないか。
そこに異存がなければ、署名、捺印をする。

よくわからない素人でも、この位は分かっている。

Nおじさんはなぜ、急いでいるのか??

疑問は持ちながらも、納得できなければ、
捺印しなければいいといくことで、11月上旬に
こちら(妻たちの実家付近)で会うことになった。

その時には、Nおじさんだけが来るらしい。

最後に妻がNおじさんに質問する。

「確定申告は、どうすればいいの？」

「大丈夫。申告する額ではないから。」とNおじさん。

知らない間に金額まで、決まっている!!!

なにかおかしいと思いながらも、よく分からないから、
問い詰めることができないまま、電話を切った。

妻は、他のひとより少しだけカンが良い。

本人曰く、「なんかわかる」らしい。

具体的な例を上げると、妊婦さんの妊娠初期の状態で
性別を間違えなく当てる。

僕が知る限りでは100%の確率で当てる。

僕がぼーっと考え事をしていてもわかってしまう。

なので、僕も隠し事をしない様になっている。

当然のように隠してもばれてしまう。

Nおじさんからの電話で、何かを感じたらしい。

この時には、その何かが具体的にわからなかったが、
確実な違和感を妻は感じているようだった。

カンの良い女性と結婚すると、何かと大変である w w

とりあえず11月上旬にNおじさんと合うことになったが、おかしいと思っても、突っ込むことができない事が悔しかったらしく、本屋に行きたいと言う。

インターネットもあるのだが、法律事務所などの広告が多く、欲しい情報にたどり着かない。

近所の割と大きめの本屋に行った。
専門書を何冊か見てみるも、なかなかよくわからない。

しばらくいろいろ物色して見ても、どれも決めてに欠ける。

もう、帰ろうと思い週刊誌コーナーに目をやった瞬間。

「相続」の文字。
とりあえず、手にとって少し読んでみる。

意外と分かりやすく書いてある。

うーん。
どうしよう。と思ったが、その場では、置いて帰ってきた。

帰ってきても、どうしても気になるので、amazonで注文した。

届いたのがこれ。

週刊ダイヤモンド 特大号。「もめない相続 賢い贈与」

まず、入りとしては、楽なところから。

妻は、黙々と読んでいた。

そろそろ、購入した週刊ダイヤモンドも読み尽くした
10月終わり、来週には話し合いと思っていたある日の夜。

妻の携帯に、Nおじさんからの電話。

「来週のやつ、できなくなった。」と、Nおじさん。

「えっ？なんで？」と返す妻。

「あっ、いや・・・。」と、言葉をにごすNおじさん。

「意味がわからない」と、来週の予定は
しっかり立てていただけに、妻も引き下がらない。

するとNおじさんがボソボソと話し出す。

「Sがごねているから、しばらく連絡取るのを控えたい。」

どうやら、とある件でSおばさんが駄々をこねているから、
Nおじさんともめているらしい。

妻は、次に集まる時期をNおじさんに聞いたところ、

「落ち着くまで、少し待つて欲しい。またこっちから連絡する。」
と言い慌てた様子で電話を切られる。

どうやら、妻たちに会うどころの話ではないことが
起こっているようだ。

電話を切られた妻は、Yさんの言葉を思い出してこう言った。

「そういえば、YさんがSお婆さんは土地を欲しがっていたって言ってたじゃん。」

ちょうど僕も同じ事を思いだしていた。

Sお婆さんが、駄々をこねている事を聞いた僕らは、今後の事も考えてきちんと起きていることを記録する事にした。

そこで購入したのは、携帯の平型イヤホン端子からICレコーダーのマイク端子に接続できるケーブル。構造的には、イヤホンマイクの途中に録音用端子が分岐している感じ。

1300円位。某家電量販店で購入。携帯の機種によって種類が違うので注意が必要。僕のiPhoneでは使えない。

ICレコーダーは、前から持ってる物を使用。

携帯からICレコーダーのマイク端子に繋いで、ICレコーダーのヘッドホン端子からヘッドホンで僕も通話を聞く事が出来る様になった。

二人で聞く事によって、疑問点とかを対話している妻に伝える事が出来るので非常に便利である。

ついでに、録音も出来る様になった。

でも、古いICレコーダーだからパソコンに取り込む事が
できないから、それはまた後から考えることにしよう。

前にも書いたが、妻たちの相続の相続人は、おじいちゃんが亡くなったので六人いる。

お義母さんが、生きていれば四人兄妹での分割になったのだが、亡くなっているので、妻たち3弟妹に代襲相続の権利が発生する。

お義母さんは兄妹四人の長女。

Nおじさん、長男。

お義母さん、長女。

Sおばさん、次女。

Kおじさん、次男。

Nおじさんは、20年程前におじいちゃんが作った、公益法人の理事長。息子が企業でいったら専務のような立場。

意外とNおじさんは地元で偉い立場らしい。

ずっとおじいちゃんが理事長をしていた様だったが、ここ二、三年で理事長に変わったらしい。

Nおじさん夫妻はおじいちゃんの葬儀の時に行った、新しい方の家に住んでいる。

古い方の家には、Nおじさんの息子が住んでいる。

最近、子供も生まれていた。

Nおじさんの家族は、奥さんと、息子、娘の四人。
娘も結婚し、子供がいるが、離れた場所に住んでいる。

亡くなったおじいちゃんは、温厚な人だったようだが、
おばあちゃんが、かなり実権を握っていたようだったようだ。

Sおばさんはだいぶ前に結婚もして、おじいちゃんの所と
隣接した市町村に住んでいるらしい。

旦那さんと娘と息子がいるだけで、特に様子はわからない。

以前から少し熱くなると、妻の実家に電話をして
怒鳴り散らす癖（笑）がある。

以前、お義母さんが亡くなって、葬儀でのゴタゴタの時には
居なかったようだが、内容を後から聞いて妻の実家に
電話をしてきたことがある。

お義父さん宛のようだが、平日の昼間に架けてきて、
留守番をしていた妻に散々文句を言ってきたらしい。

お義母さんが亡くなって、妻も精神的に大変な時期だったが、
とりあえずゴタゴタを収めようとお義父さんとSおばさんの間を
仲裁しようと頑張っていた。

Yさんが言っていたのだが、Sおばさんは自分の生まれ育った土地に帰ってきたいらしいし、Nおじさんの公益法人で働いていたらしいが、お盆前になぜか辞めさせられたらしい。

理由はYさんにもよくわからないとのことだった。

いずれにしても、ちょっと熱いので疲れるおばさんである。

Kおじさんは中学卒業後から、田舎を離れ今は都内の大企業に勤めている。

家族は奥さんのみで子供なし。

夫婦ともにとっても穏やかな人で話しやすい。
何度か僕達家族が、都内に遊びに行ったとき、
ご飯をご馳走してくれたりした。

今回の相続で妻たちとNおじさんたちの間に入って
連絡係をしてくれている。一番心労が絶えないのは、
間違いなくKおじさんであろうと思う。

そうは言いつつ妻曰く、Kおじさんも
兄弟 > めい、おい
らしいので、そのつもりでいよう。

最近、整体にかなりはまっているらしい。

11月に話し合いの約束をしていた。
しかし、Sおばさんがゴネたせいで話し合いが
流れてしまったのが、10月のこと。

あれから4ヶ月がたった2月。

本当にあれから全く連絡なし。
どうなっている事やら・・・。

Sおばさんがゴネたのはどう収まったのか??

疑問は持ちつつも、妻曰く
「こっちからは連絡しない。だって、なんか急いでる
みたいじゃん。別に急いでないし、財産目当てでもないから。
無駄な連絡はしない。」ということらしい。

そんな会話を妻としていた矢先に、Kおじさんの
奥さんからメールが来た。

4ヶ月も放置されていたが、Kおじさんの奥さんの
携帯経由でメールが来た。
「3月下旬（指定日）に集まりましょう。」という内容だった。

妻は、いきなり行ってもその場でわからないまま
帰ってくると無駄になると思い、「金額が決まっている
ようなので、根拠となる資料（財産目録、固定資産評価証明書など）
を送ってもらい、3人で話をしてから行きたい。また金額が
決まっているが、母の権利である法定相続分を知りたい」と
ちょっと固く強い内容で返信をする。

すると、Kおじさんの奥さんから妻に電話が来た。
「とりあえず集まって話をすればいいじゃない。」
と、一方的なアドバイス内容だった。

妻は「何もないとわからないし、なんだか知らない
間に決まっているようだから。」と返す。

「Kさんに伝えておきますので。」と言い、
Kおじさんの奥さんは電話を切った。

少したって、Kおじさんから妻の携帯に連絡があった。
「ちょっとあの内容にびっくりして……。文章は
きつい内容になってしまうから、気をつけて。」と、
妻にKおじさんは言った。

妻は「内容を分かって参加したほうが、時間も
かからないし、分からないことを聞くこともできるから。」
とKおじさんに言う。

するとKおじさんは「意向はわかりました。
兄貴に伝えておきます。」と電話を切った。

Kおじさんから連絡が来た翌日。

今度は、Nおじさんから連絡が来た。

内容は「資料は来たときに見せるから、3月に一度こちらに来なさい。」とのこと。

妻は、11月は妻たちの実家近くまで来てくれると言っていたので、Nおじさんに言ってみた。

すると、「お前たちにそんな権利はないんだ！！黙ってこっちに合わせるもんだ！！自分のことを何様だと思っているんだ。お前たちにこちらが合わせるんじゃなくて、お前たちがこちらに合わせるのが当たり前だ！！！」と、いきなり強引な口調。

妻は、あまり強引な口調で言われたので、こう答えた。

「なんだか金額も決まっているようなので、まずあらかじめ資料（財産目録など）を送って頂いて、3人で話し合い、その後に行きたい。」と伝えると、「こっちで、みんなで集まった時に司法書士の先生から話があるから！！！」と、相手にされない。

妻もそんな言われようが続き、かなりムカついていた。

「私一人の予定では決められない」と伝え電話を切る。

すぐに妹ちゃんに連絡して弟くんと、どうするのかを確認した。

妻はかなりの怒りっぷり。

その後妻は、Nおじさんに連絡する。

「資料（財産目録など）も出してくれないし、日程も勝手に決まって、半強制的に来なさいって言われても行けない。予定あるし。」それが妻たち3人話しあった答え。

Nおじさんにその旨を伝える。

「こっちだって忙しい中集まるんだから、こっちに合わせて欲しい。」と言われる。

妻も「何ヶ月も連絡がないのに、いきなり来いって、言われても」と言い返す。

黙るNおじさん。

「それに、資料（財産目録など）も送って貰えないようだし。内容を確認してから話し合いをしたいし、あらかじめ内容を見ておかないと、質問もできないから。」と、さらに妻は言う。

Nおじさんは、

「別にそれは来た時に見ればいい。」と、話は平行線。

結局「それでは予定があるのでいけない。」と、妻が言い3月の集まりは無くなった。

【収録話】

・まるいち 1-21 相続開始編

【第一話】 とつぜん妻が相続することになりました。

【第二話】 ことのはじまり。

【第三話】 相続ってなんなの？

【第四話】 妻たちの決意。

【第五話】 お墓参りに行こう。

【第六話】 さらなる訃報。

【第七話】 意外と近くの親戚。

【第八話】 道の駅集合。

【第九話】 おじいちゃんと静かな再会。

【第十話】 いまするべきこと。

【第十一話】 音沙汰なし。

【第十二話】 カンの良さ。

【第十三話】 勉強しよう。

【第十四話】 とつぜんの電話。

【第十五話】 設備投資をしよう。その1。

【第十六話】 相続人 Nおじさん。

【第十七話】 相続人 Sおばさん

【第十八話】 相続人 Kおじさん。

【第十九話】 四ヶ月放置。

【第二十話】 メールで連絡が来た。

【第二十一話】 Nおじさんからの連絡。